

Buddhaguhya と Ānandagarbha の 『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について

中 島 小 乃 美

はじめに

この『一切悪趣清浄儀軌』 *Sarvadurgatipariśodhanakalpanāma*. (D.No.483.ta, P. No.116.ta) は瑜伽タントラ (yogatantra) に属する経軌¹⁾である。これには大部な註釈が 5 本あり、『大日経』と『金剛頂経』を註釈した Buddhaguhya (以下, BG) の字義釈, 『金剛頂経』と『理趣広経』を註釈した Ānandagarbha (以下, ĀG), その他に Kāmadhenu, Vajravārman と著者不明のものがある。

チベットの僧ツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419) もこの経軌に対する割り注を残しており、その冒頭でこれらの註釈について以下のように述べている。「BG のものは、BG のお言葉をノートしたもの、ĀG のものは、チベット人によって書かれ、ĀG の名前を借りたもの…」 (lHa sa.2b, bKra shis lhun po .2b) としており、これらの真偽については先行研究でも検討されている²⁾。続いてツォンカパは、「これらの著作には不適當なところもあるが、インドのよいところも多く残しており、それらを吟味して理解すべきである」 (lHa sa.2b, bKra shis lhun po.2b) と述べているように、実際に読み進めてみると、単に真偽の問題だけでは片付けられないものがあり、瑜伽タントラを理解する上で示唆されるところが多いことがわかった。

今回は、これらの註釈中から主に ĀG の註釈を取り上げ、BG の註釈と比較することでその構造の特徴を明らかにし、経軌理解の一助としたい。

1. Ānandagarbha の註釈と Buddhaguhya の註釈との違い

本経軌は、mūlatantra, uttaratantra, uttara-uttaratantra の三つから成り、合わせて 12 のマンドラを説く。普明ヴィルシャナマンドラを説く mūlatantra の解釈では、BG が『大日経』寄りの深秘釈を示していたのに対し、ĀG は『金剛頂経』寄りの解釈を示している³⁾。

(108) BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について(中 島)

また ĀG は、註釈のはじめに科分を示し、マンドラごとに三三摩地（第一瑜伽、内心マンラ最勝王三摩地、羯磨最勝王三摩地）⁴⁾ として解釈することを示している（表1を参照）。この三三摩地という悉地にいたる次第が説かれるのは、『金剛頂経』よりもむしろ本経軌と同様に釈タントラとして知られる *Vajrasekharamahāguhya-yogatantra*（以下、VŚ；D.No.480. nya, P.No.113. nya）においてである⁵⁾。ĀG は『金剛頂経』、『理趣広経』の註釈でも同様に三三摩地を用いて註釈している⁶⁾。BG も *Tantrārthāvatāra*. (D.No.2501.i, P.No.3324. dzi) の中で VŚ を引用しているため、經典の存在は認識していたはずだが、本経軌では三三摩地としての解釈を示さず字義釈としていることから、意味を理解することに主眼をおいてまとめられたものであると考えられる。

更に ĀG は註釈の中で『大日経』、『金剛頂経』、『理趣広経』、『金剛手灌頂タントラ』（D.No.496. da, P.No.130.da）などを引用しているが、中でも VŚ の引用は群を抜き、20 カ所ほどに見られる⁷⁾。そのほとんどが *mūlatantra* の解釈に当てられ、次いで *uttaratantra* の最初に説かれる釈迦牟尼マンダラの解釈に僅かに見られ、それ以後は引用表現そのものが見当たらない。

2. 註釈の配分とコロフォン

ĀG の註釈は、最初の科分では *uttara-uttaratantra* までの三三摩地が示されていたが、実際の本文は *uttaratantra* までで終わっている（表1を参照）。そして通常、巻末に見られる著者名が *uttaratantra* の科分の後、*uttara-uttaratantra* の科分の後、*mūlatantra* の註釈の最後に、そして *uttaratantra* の註釈の最後、すなわち本註釈そのものの最後の計4カ所に見られる。その最後のコロフォンに見られる著者名が北京版では Buddhānandagarbha, 「slob dpon sangs rgyas kun dga' snying pos mdzad pa rdzogs so//」(P.114b) となっている。

また、註釈の配分は根本マンダラの普明ヴィルシャナマンダラが説かれる *mūlatantra* は63葉（約64.9%）、釈迦牟尼マンダラから天部のマンダラ、合わせて10のマンダラが説かれる *uttaratantra* は34葉（約35%）であり、マンダラの説かれる割合からすると、ひどくバランスの悪い構成となっている。

BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について(中 島) (109)

表1 BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの註釈による科分

BGの註釈の科分	当該箇所	ĀGの註釈中の科分	ĀG註釈の実際の説示	当該箇所
根本タントラ (mūlatantra)		根本タントラ (mūlatantra)		
I 普明ヴィルシヤナマンガラ		I 普明ヴィルシヤナマンガラ		
帰敬偈	152b		帰敬偈	1b
タントラ略義	152b-153b		三身仏頂大タントラ義 起源, 緒論 (略説)	1b-4a
1. 起源, 2. 義釈				
タントラ義 理解の三種機根	153b-154b		科分	4a-8a
1. 上根者の理解, 2. 中根者の理解, 3. 下根者の理解				
起源・通序段	154b-161a		般若と方便の本質, 十真実	8a-b
			大乘波羅蜜と密教タントラの関係	8b
1. 五成就 (教主, 時・聞, 処, 世間, 出世間眷属成就)			四成就 (時・聞, 処, 世間, 出世間眷属成就)	8b-13a
緒論・別序段	161a-162a		起源・緒論 (広説)	
			タントラ義出生の特別の起源	13a-14a
1. 請問, 2. 教令と許可, 3. 許可の喜び	162a-b	1. 眷属加持	眷属加持	14a-b
4. 世尊の心真言加持 1) 真言の略義, 2) 真言の功德	162b	2. 第一瑜伽	第一瑜伽	14b-16b
		マンガラ最勝王 (内・心・マンガラの三摩地)	マンガラ最勝王 (内・心・マンガラの三摩地)	16b-20b
5. 悪趣に生まれた有情のマンガラ引入と灌頂儀軌方便	165a-b			
6. 説示への請問	165b		利益	20a-b
7. 根本マンガラ儀軌 (普明ヴィルシヤナマンガラ)	165b-177a	4. 自性マンガラ	自性マンガラ 生起次第, 究竟次第	20b-24a

(110) BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切惡趣清淨儀軌』の註釈構造について(中 島)

1) 外マンドラ (影像マンドラ)		5. 阿闍梨の作業次第大儀軌 〔羯磨最勝王三摩地〕	阿闍梨の作業次第大儀軌 〔羯磨最勝王三摩地〕	24a-38a
中 略				
XII 金剛忿怒火焰日輪マンドラ		XII 金剛忿怒火焰日輪マンドラ	不説	
1. 金剛忿怒火焰日輪マンドラの説 示	216b	1. 金剛火焰日輪の勧請と第一瑜伽 (内心のマンドラ) とマンドラ最勝王三摩地		
2. マンドラの相, 3. 眷属のマンドラ, 4. 瓶のマンドラ	216b-218a	2. 阿闍梨の作業と羯磨最勝王三摩地, 供養, 散布		
5. 入マンドラ, 6. 成就の許可, 7. 弟子引入, 8. 取得悉地, 9. マンドラより退出	218a-219a	3. 阿闍梨が入〔壇〕し, 四門における成就法と灌頂次第		
10. 成就法, 11. 未成就時の取得儀軌	219a-b	4. 成就法		
12. 守護儀軌	219b-220a	5. 守護すべき次第		
13. 息災護摩, 14. 増益護摩, 15. 敬愛護摩	220a-224a	6. 息災護摩, 7. 増益, 8. 敬愛〔護摩〕作業次第		
16. 降伏護摩 (BG 解釈なし. 経軌デルゲ「降伏護摩」の部分は無し)		9. 〔金剛火焰日輪の降伏護摩作業次第〕		
17. 一百八名讃	224a-228a	10. 供養, 11. 金剛手の讃嘆		
18. タントラの意味を理解せられるべきことの説示 (一部再説)	229a-230b	12. 讃嘆する功德は釈迦牟尼が仰せられたこと		
19. 眷属の喜び	230b-231a	13. 相続の委託と信任		
祝福の偈と著作者	231a		✓	

※ XI 四部族転輪マンドラ以降, 不説となっている. また, 当該箇所の頁数はデルゲ版とした.

BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について(中 島) (111)

3. Buddhaguhya の註釈の影響

ĀG の mūlatantra の解釈は、BG とほぼ同様の形式を採りながらも『金剛頂経』的な解釈を示していた。しかし、uttaratantra 以降、BG の註釈を下敷きにして、そこに三三摩地を加えるという註釈形式をとっているように思われる。

九仏頂マンダラの解釈では、「タントラ説示者の特相」⁸⁾に同一表現が3カ所あり、特にマンダラ諸尊の解釈は、広範囲にわたってほとんど同じである(頁の関係上、この部分の引用は省いた)。更に「天子無垢光の前業の異熟による請問」もほとんど同じ表現が見られ、この部分から各マンダラごとの同一箇所をあげると以下ようになる。なお表記中、ゴチック体は経軌の文、下線は同一表現、[] は BG にあり、ĀG にない所を示した。

【九仏頂マンダラ】「天子無垢光の前業の異熟による請問」

de nas (P. nas -) tshangs pa la sogs pa'i lha rnam zhes bya ba nas sdug bsngal gyi dbang du gyur zhes pa'i bar gyis ni/ nor bu dri ma med pa'i 'od kyis sngon las ci byas zhes pa'o/ / de nas bcom ldan 'das zhes pa nas/ [ma 'ongs] yang dus las 'das so zhes pa'i bar gyis ni/ las kyi rnam par smin pa'i [ngan par smin pa'i] rgyu bstan/ lan cig ci (P. gcig) zhig gi rkyen gyis zhes pa nas rang rang bde ba dang ldan par skyes zhes pa'i bar gyis ni [las kyi rnam par smin pa] ma nges pa'i don bstan te/ 'bras bu ngan song du skye rgyu las rkyen drang srong dang phrad nas lhar skyes pa'i don bstan to/ / lha'i dbang po nyon cig ces pa nas/ lha'i 'khor 'di dag yin no/ / zhes pai bar gyis ni sngon las mthun pa'i phrin las kyi 'brel pa bstan to//

それから梵などの諸天から苦の目撃者までは、無垢光の光明を以て以前から何をしたかということ。時に世尊がから未来時より超えるまでは、業の異熟因が説かれ、同時に何かの縁によってからのおの喜樂を伴うものに生まれまでは、[業の異熟の]未決定の義が説かれ、果として悪趣に生まれ、因たる業縁として仙人と遇って天に生まれた意味が説かれた。天主よ聴けからこれら天の眷属であるまでは前業に一致する御作業の相連(因果関係)が説かれた。(D.75a-b, P.86b-87a)

【断無量業障マンダラ】「十名讃と勧請と許可」

da ni tshe dpag med las kyi sgrib pa brgyun (P. rgyun) gcod pa'i [maṇḍala gyi] don bstan te/ de la tshe ni ye shes so/ / dpag med ni dngos po thams cad dang 'bral ba'o/ / las ni dge sdig rnam pa gnyis so/ / sgrib pa ni nam mkha' dngas pa la sprin gyis (P. gyis -) gyogs pa dang 'dra bar kun gzhi la rtog pa glo bur bas sgrib (P. bsgribs) pa'o [pa'i tha tshig go] // rgyun gcod pa ni ngyen po las (P. lam) gyi ye shes kyis mi mthun pa'i phyogs rgyun gcod pa'o/ / dkyil ni dpag med de chos nyid do/ / 'khor ni tshe ste ye shes bzhi'i 'khor ro/ de bshad pa'i phyir zhu ba la sogs pa ston to//

今度は断無量業障[マンダラ]義が説かれて、それに関し、寿とは智慧である、無量と

(112) BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について(中 島)

は一切法を遠離していること。業とは、善悪の二種である。障とは明浄な虚空を雲が覆うに等しく、阿頼耶を客塵分別が障碍すること。相續を断ずるとは、対治の〔聖〕道(P.を採った)の智〔力〕によって、不一致の見解の相續を断ずること。maṇḍaとは無量なるその法性である。laとは寿で四智の眷属である。それを示さんが故に請問などが説かれた。(D.75b, P.87a)

【四天王マンドラ】冒頭部。

de nas rgyal po chen po bzhis zhes pa ni de nas ni tshe dpag med kyi rting thogs su 'byung ba la bya'o ['byung ba'i phyir na de nas zhes bya'o] // rgyal po chen po bzhi ni lha'i rgyal po yin pa'i phyir ro//

次いで四天王がとは、次いでとは無量寿の後にしているからそういう。四天王とは、天の王であるからである。(D.80a-b, P.93b)

【十護法マンドラ, 八大曜星マンドラ, 八大龍マンドラ】三三摩地のみの解釈であるため、同一表現なし。

【八大畏怖マンドラ】冒頭部。

da ni 'jigs byed brgyad kyi dkyil 'khor bshad de/ de yang lha gdon la sogs pa zhi bar bya'i phyir bshad do // de nas lha chen po rnams kyi (P. kyis) bdag po 'jigs par byed pa chen po brgyad bud med chen po brgyad kyis bskor bas zhes gsungs te/ da (P. de) ni gong gi klu chen po brgyad kyi mjug sdus pa'o/ / nas ni 'jigs byed chen po brgyad kyi mgo 'dren pa'o/ / lha chen po rnams kyis (P. kyi) zhes pa ni/ lha chen po nyi shu rtsa gcig rnams so / / de la gtso bo smos pa ni brgyad do/ / bud med ni rang gi btsun mo chen mo brgyad ni maha' de ba'i chung ma bher ma dang/...

今度は、八大畏怖のマンドラが説かれて、それはまた天の悪星 (graha) などを息滅せんために説かれた。次いで大天たちの主が八大畏怖、八大畏怖女によって圍繞されて、と仰せられ、それは前の八大龍の後ろに続いているからである。からとは、八大畏怖の冒頭を引き継ぐこと。大天たちのとは、二十一大天たちである。そのなか、主として申されたのは八である。女人とは自らの八大妻, mahādeva の妻の… (D.86b, P.101a)

【八大天マンドラ】同一表現なし。

【摧壞死魔無量寿マンドラ】冒頭部。

da ni 'di ni nas tshe dpag med 'chi bdag 'joms pa'i dkyil 'khor bshad de/ de yang sems can dus ma yin par 'chi bas 'jigs pa'i phyir dkyil 'khor gsungs te/ de nas bcom ldan 'das phyag na rdo rje nyid kyi 'khor kyi dkyil 'khor la kun tu gzigs nas/ 'dzum pa mdzad pa dang/ zhes pa ni thugs yang dag pa'i ye shes las skyes pa'i phyag na rdo rje nyid kyi 'khor gyi dkyil 'khor sna tshogs la/ rtshe dpag med kyi dkyil 'khor bshad par bzhed (P. bzhes) nas glang po chen po'i lta stangs kyis kun du gzigs nas zhal mdzum pa gser kyi kho dog lta bu mdzad pa'i 'od kyis 'jig rten gyi khams thams cad snang bar mdzad/..... rmad kyi ya mtshan du ma 'jig rten du snang bar gyur to zhes pa ni dga' ldan gyi gnas nas mi'i yul du babs te/ mdzad pa bcu gnyis kyi tshul mngon

BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について(中 島) (113)

par sangs rgyas pa'i tha tshig gis sems can gyi don byas pa'o//

今度はこれら摧壊死魔無量寿マンダラが説かれ、それはまた有情が非時死によって恐怖する故にマンダラが仰せられ、次いで具徳金剛手は自身の衆会を普くご覧になられて微笑なされたことと、とは、清浄智の意から生じた金剛手自身の種々の衆会に無量寿のマンダラを説くことを望まれて、像の瞥見で普くご覧になられて、面は黄金の色彩のごとき微笑をなされて、光明を以て一切世間を照らされた..... 多くの希有なるものを世間に顕現されとは、十二の御作業の理趣として現等覚されたことの同義語であり、有情利益をなされたことである。(D.91a, P.106b-107a)

以上、BG と ĀG の同一箇所を見てきたが、これをみると冒頭部分、何故説かれたのかという勧請と許可の解釈部分に多く見られることがわかる。

また護摩 (homa) の解釈では、息災護摩の解釈に共通性が見られ、まとめると以下の表のようになる。

表2 ĀG と BG の護摩炉の解釈

サイズ・形		ĀG	BG
下	一肘	所取・能取の両者を遠離して住している象徴	所取・能取の二相を遠離している象徴
中	二肘	方便と般若の二資量道と加行道に住している象徴	方便と般若の二相を具えている象徴
上	三肘	加行道の四智を具えている象徴	四無量心を具えている象徴
丸炉		勝義真実を具えた象徴	物の辺 (二辺) を離れた象徴

(D.95b, P.112b)

(D.207b, P.245b-246a)

このように、BG のものに少し解釈が加わり、ほぼ同一の解釈が示されている。次いで、増益護摩では解釈に一部、同じところが見られた。

mkhas pas rgyas pa bya dgos te zhes pas mkhas pa ni sgrub pa po [cho ga] las dang bya ba la mkhas pa'o/ /rgyas pa ni dpal dang 'byor pa [gzi brjid]'phel ro//

賢者は増益すべきでありとは、賢者とは瑜伽者であり、作業と所作に巧みな者である。増益とは、吉祥と財産を増長させること。(D.96a, P.113a-b)

また敬愛護摩については同一箇所は見当たらず、ほとんど経軌の文章をそのまま用いている部分が多い。降伏護摩については、BG の場合は「説かれなかった」という記載があり、チベットの訳経事情によるものか判断しかねるが、ĀG の場合は他の三種護摩と同レベルで解釈されており、特に翻訳上の制限はなかったものと見られる。

経軌は続いて *uttara-uttaratantra* を説き、ĀG 自身もこの部分の科分を示してい

(114) BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について(中 島)

るが、実際の註釈はここまでで終わっている。

考察

以上、BGとĀGの註釈を比較し、ĀGの註釈構造の特徴を指摘した。これらをまとめると、先ずBGの註釈は、仏教が共通に持っていた悪趣を清浄にするというテーマが、大乘から密教へと変化していく中でどのように位置づけられていくのか、といった義(意味)の部分の理解に主眼を置いたものである。それはまた、BGのmūlatantraの解釈が、出世間の眷属やマンダラ諸尊に『大日経』的な解釈を示していることから、悪趣を清浄にするという意味が、天部の神々の力を活かして世間的な苦しみを除きながらも、目指すところは世間的な幸福ではなく無自性空の悟りにあることを明確にしようとしたものだと考えられる。

一方ĀGは、mūlatantraの出世間の眷属やマンダラ諸尊の解釈に五相成身観や、金剛界の諸尊を当てていることと、更に同じ瑜伽タントラであるVŚを20カ所ほど引用し、三三摩地の概念を用いて註釈していることから『金剛頂経』的な解釈を示している。

更に、註釈全体でBGの文章をほぼそのまま11カ所ほど引用していることから、BGの註釈を知った上で、その一部を下敷きとし、悉地(siddhi)に至る瑜伽次第として三三摩地を取り入れて解釈していることが指摘できる。またこの三三摩地として解釈する方法は、ĀGの『金剛頂経』や『理趣広経』の註釈にも同様に用いられており、実際に観想しマンダラを描き、修法して行くことに主眼を置いたものであり、そのような意味においてもチベットで重視されていた経緯が窺える。

ところで、この註釈には著者名が4カ所に見られ不自然である。mūlatantraの註釈スタイルはBGとほぼ同じであり、『金剛頂経』的で詳細な解釈をしているが、uttaratantra以降にBGの註釈と同一箇所が目立ち、最後のuttara-uttaratantraの註釈が見られないことから、mūlatantraまではĀG本人か、彼の著作を熟知している者によって作られ、uttaratantraはBGを下敷きにして註釈書の形を整えるために著されたように思われる。

-
- 1) 経軌という言葉は、これが經典と儀軌とを併せ持つタイプのものであり、名称がsūtraやtantraではなくkalpaであることからこのように略称した。何故kalpaであるかについては、諸註釈の中で示されているが、おおむね「諸仏の無分別智から分別されたものとしての諸説示である」と解釈されており、これは『金剛頂経』の「諸仏無分

BuddhaguhyaとĀnandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』の註釈構造について(中 島) (115)

別大智 是智所生法常住 無分別後起智門 此分別説無分別 由無分別我分別 此分別已分別生 金剛薩埵大士尊 説彼分別為方便」(T.18.p.441b)という教説を一步進めた形を取っていると考えられる。またこの部分については、北村太道「瑜伽タントラにおける「教理」について」『平安仏教学会年報』4, 2006年, pp.1-2に詳しい。

- 2) A.Wayman: THE DISPUTED AUTHORSHIP OF TIBETAN CANONICAL COMMENTARIES ON THE SATVADUEGATIPARIŚODHANA-TANTRA,『雲井記念論集』, 1985, pp.201-213. および, T.Skorupski: *The Sarvadurgatipariśodhana-tantra: Elimination of All Evil Destinies*, New Delhi, Motilal Banarsidass.
- 3) 拙稿「Ānandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』観」『密教学』39, 2003年にて詳細は指摘した。
- 4) 三三摩地は、第一瑜伽(sbyor ba dang po)とマンダラ最勝王(dkyil 'khor rgyal po), 内心のマンダラ三摩地(nang sems kyi dkyil 'khor gyi ting nge 'dzin)とあり、本経軌では羯磨最勝王という名称は用いず、阿闍梨の作業次第儀軌(slob dpon gyi las kyi rim pa cho ga)とある。
- 5) VSには、「dang po sbyor ba'i ting 'dzin mchog/ / rnal 'byor bas ni snyams 'jug bya/ / de nas dkyil 'khor rgyal po mchog/ / de nas yang ni las rgyal po//」(D.170a, P.192b)とあり、これについては、タントラ仏教研究会「『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』和訳(4)」『密教学』38, 2002年, p.44を参照。
- 6) 『金剛頂経』の註釈(D.No.2510.shi, P.No.3333.zi)では、第一瑜伽、マンダラ最勝王三摩地、羯磨最勝王三摩地としており(D.3b, P.4a), 堀内寛仁『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂編』密教文化研究所, 1974年では、章立てにこのスタイルを用いている。また『理趣広経』の註釈(D.No.2512.hi, P.No.3335.yi)では「第一瑜伽三摩地, 第二の三摩地, 第三の三摩地」(D.13b,15a)としている。
- 7) 引用の詳細は、拙稿「Ānandagarbha著『一切悪趣清浄儀軌』に見る *Vajraśekharatantra* の引用について」『密教学』43, 2007年を参照。
- 8) 「 」は科分で示された名称。

本稿をまとめるにあたり、種智院大学名誉教授・北村太道先生にご示唆を賜った。また日頃、ともにVSの翻訳研究に取り組んで下さっているタントラ仏教研究会の皆様に末筆ながら深謝申し上げる。

〈キーワード〉 *Durgatipariśodhanakalpa*, ブッダグヒヤ, アーナンダガルバ, 註釈構造
(奈良県立医科大学医学部看護学科講師, 博士(文学))